黒い犬

水面

夫の駿介がある時突然黒い犬を連れてきて「うちで飼う」と言い出した。いつのことだったかは忘れたが、もうその犬が我が家に住み始めてしばらくが経つ気がする。少し大きめの中型犬サイズの黒い犬は知らぬ間に私たちの生活に入り込んできたのだ。駿介は犬が特別好きだったわけではないはずなので最初は驚いたが、どうしてもというので渋々受け入れた。そもそも私は犬があまり好きではない。子犬の甲高い泣き声はずっと聞いていると気に障るし、大型犬はペットというより獣のように感じられて怖いと思ってしまう。あんなに大きい動物が言うことを聞かなくなったら、と思うとどうしても安心できないのだ。駿介が飼いたいだなんて言わなければ、一生犬など飼わなかっただろう。黒い犬の名前はタロウという。もっとポチとか犬らしい名前があるだろうに、と思ったけど、ずっとタロウと名付けたいと思っていたんだと、駿介が言うのでまあいいだろう。リビングに目をやるとタロウはすやすやと眠っている。

こうして静かに寝ているときはいいのだが、起きて吠え始めたり、遊んでくれと催促し始めると私は困ってしまう。どう扱ってよいのかも分からないし、細々とした家事も色々あるのに、意外と時間を取られてしまう。インテリアにはこだわりがあるタイプだったが、テレビ台の横に並べた置物は倒されるので置くのをやめたし、毛足の長いクリーム色のラグは汚されるかもしれないので片づけた。タロウを飼い始めてから諦めたことはいろいろあったが、一番頭を悩ませているのがタロウが頻繁に粗相をすることだ。自分なりにトイレのしつけはしたつもりだったが上手くいかず、気づくとリビングの隅やキッチンのフローリングなどがタロウの糞尿で汚されていることが週に何度かある。なんで私がこんな事しなくちゃいけないんだろう、と思いつつも、日中は駿介も仕事でいないし、私以外に世話をする人間はいない。

そもそも駿介は自分も世話をするから、と言っていたのにほとんど世話をしているところを見たことがない。平日の昼間は会社にいるから仕方ないにしろ、帰宅した後や土日にも手伝うことすらしなかった。エサやペットシーツを買いに行くのも私。正直うんざりしていた。その割に暇ができた時、気が向いた時だけタロウを散歩に連れて行ったり、遊んでやったりするのだからどうも納得がいかない。最近では土日はタロウを連れて出かけ、丸一日帰ってこないこともあった。

今日も買い物に行こうとしたところでタロウがおもちゃを持ってやってきて、なかなか家を出ることができなかった。餌がないだとか、遊んでくれだとか、トイレが分からないだとか、そういうたびにタロウは私の足に纏わりついてくるので、家事もろくに捗らない。そのせいで夕食は簡単な炒め物とみそ汁というメニューになってしまった。そろそろ七時半だから駿介が帰ってくるはずだ。

ガチャリ、とドアが開く音がする。無言のまま駿介がリビングへとやってくる。

「…」

いつからか駿介は家にいると不機嫌な顔をするようになった。これもタロウが家に来てしばらくしてからのことだろうか。

＊

今日もまたタロウが夜中に吠えるので、あまり眠れなかった。時間が時間だし近所からクレームを入れられる

のが怖くて、私は起きて何度かリビングに行った。室内犬のはずなのに何でこんなに吠えるんだろう。静かにさせようとおやつを少し与えてみたが、なかなか鳴き止むことがなく、思わず近寄ってきたタロウの顔を「うるさい」と言って手で払ってしまった。

そうすると静かになったが、タロウがなんだか悲しげな目でこちらを見てくる。犬だから言葉なんて分からないはずなのに、そんな責めるような目でこっちをみないでよ。大人しくなったタロウを見届けてリビングを後にするが、駿介は一向に起きてくる気配がない。なぜこんなに寝ていられるのかが不思議だったし、もう何も期待できないと思った。

*

そういえばきちんと料理してなかったな、とここ数週間を振り返る。やたら手のかかるタロウのせいで野菜炒めなんかの簡単なメニューしか晩御飯に出さなかったな。そういえば前は煮込み料理なんかの時間のかかる料理を作るのが楽しみの一つだった。久しぶりに少し手の込んだものでも作りたい。駿介の好物のビーフシチューでも作って、タロウのことについて話し合おうってはっきり言おう。きっと分かってくれるはずだから。

キッチンへ移動して冷蔵庫の中を覗く。玉ねぎはあるけど肝心の牛すね肉とマッシュルームがないので、エコバッグを持ってスーパーに向かう。道中、駿介がタロウを家に連れてくる前のことを思い出していた。ケージがなかったからリビングももっと広かったし、散らかることもなかったから掃除も楽だった。何より粗相をされるのが嫌で、それに関して駿介に文句を言っても「しょうがないだろう」と答えるばかり。犬がこんなに手がかかるだなんて思わなかった。これまで犬が好きなんて言ったこともないのに、どうして急に飼おうなどと思ったのだろう。そういえばいつからタロウは家にいるんだっけ。夫婦だけの生活に私は不満なんてなかったのに。

あれこれと考えるうちにスーパーに到着した。野菜コーナーに近い自動ドアが開き、ひんやりとした空気に体を通す。玉ねぎもあと少ししかなかったから買い足しておこうかなどと思っていると、見覚えのある人が立ち話をしているのが見えた。同じマンションの村上さんともう一人は名前を忘れてしまったが多分六階の住人だ。思わずじっと見てしまったのか、二人もこちらに気づいたようだ。いつもなら軽く挨拶をしてくれる村上さんだったが、なぜか気まずそうに目を逸らされた。村上さんとはそれほど会うわけではないので、何か気に障るようなことをしたわけでもないはずなのだが。そう不思議に思っていた時、はっと気づいた。もしかしてタロウの泣き声がうるさくて村上さんや他の住人の方のお宅まで聞こえていて噂になっているのかもしれない。話しかけて何か言われたら、と不安になったが一応謝っておこうと思い、不安になりながらも二人の方へ歩いていく。

「あの～」

村上さんがぎょっとした顔をして振り向く。

「お久しぶりです。隣の柴田です。」

「ああ、どうも」

一緒にいる住人も村上さんのほうを横目で見ながら、よそよそしい挨拶を返した。

「もしかしてうちから犬の泣き声とか聞こえてきます？うるさくしてたら申し訳ありません。きちんと躾けるので本当すみません」

緊張しながらもそう断りを入れると、二人はちらちらと顔を見合わせている。涼しいはずの店内でじんわりと汗が滲むのを感じる。

「ああ」

とだけ村上さんは答えて、その後も何か言いたげだったが、その場の空気に耐えかねた私は「ご迷惑かけてすみません」とだけもう一度行って足早に立ち去った。通り過ぎた鮮魚コーナーでは、子持ちシシャモに二割引きのシールが貼られていた。牛すね肉と玉ねぎと牛乳だけをもって急いでレジに向かう。特に問題はないと思っていたご近所づきあいが途端に不安になった。

スーパーを出た後、横にあるホームセンターにも足を伸ばす。タロウがなかなかトイレを覚えないので、仕方ないけれどケージを買うことにした。大型犬用のケージが売っていたのでそれにした。このサイズならタロウには余裕があるのでいいだろう。

ようやく家に着くと食材が入ったビニール袋とケージの箱を床に降ろす。組み立て式なのでかさばることはないが、それなりの大きさのケージなのでやはり重い。ケージをリビングに置いて、食材をキッチンへと移動させる。

スーパーの袋の中から玉ねぎを取り出して皮を剥く。少し細めのくし切りにして、色が変わるまで炒める。一通り下ごしらえを済ませて、あとは圧力鍋で煮込むだけというところで、今のうちにケージを組み立ててしまおうと思った。リビングに行って箱を開けてみると、丁寧な説明書がついていたので私一人でも案外簡単に組み立てられた。

窓際に目をやると黒い犬がこちらを見ている。

「タロウ、こっちおいで」

名前を呼ぶと、思ったよりもすんなりとやってきた。ケージの扉を開けて入るように促すと、嫌がるそぶりを見せた。
「タロウ、入りなさい」
ケージを指さして命令してみても、タロウはいうことを聞かない。後ろ脚の辺りを押して、無理やり入れようとすると、きゃんきゃんと暴れだした。もう抱えて入れてしまおうと思って腹部に手を伸ばすと、タロウが私の手を噛んだ。
「いたいっ」
思わず叫んで後ずさる。右手を見ると傷はできていなかったがうっすらと歯形がついていた。もう私はどうしてよいか分からなかった。犬に怯える日々は嫌だったし、自由を制限されるのも嫌だった。こんな犬飼いたくなかった。噛まれたほうの手を庇いながら無理やりタロウをケージの中に押し込み、外から簡易的な鍵をかける。タロウはケージの中から私の方を見て「出せ」と言わんばかりに吠え始めたが、せめて駿介が帰ってきて、話し合いが終わるまではここに入れておこう。
傷にはなっていないが念のため、と思い消毒液を探して戸棚を開ける。消毒液のボトルに着いたキャラクターの笑顔でさえも、私をあざ笑っているように感じて憂鬱だった。
ビーフシチューを煮込む間にと思っていたはずが、かなりの時間が経っていた。そろそろ牛肉が柔らかく煮込まれただろう、と気を取り直してキッチンへ向かう。キッチンへ向かう。駿介がもう帰ってくるだろうと器に盛りつけて、サラダなんかも一緒にダイニングのテーブルに並べた。すると、タイミングよく玄関の扉があく音がした。
相変わらず何も言わない。
「ただいまくらい言ってよ」
相変わらず無言の駿介に苛立ちを覚えてつい本音が出てしまった。
「……ただいま」
小さな声でようやく返事をした。
「今日あなたの好きなビーフシチューだよ。ごはん食べたらタロウのこときちんと話し合いたいと思って」
そういうと駿介は驚いた様子でこちらを見て、こう言った。
「ようやく目を覚ましてくれたのか」
駿介の言っていることの意味が分からずに、詳しく尋ねようとすると。クーンクーンというタロウの泣き声がリビングから聞こえた。駿介は慌ててリビングの奥に目をやると、血相を変えてタロウのもとへ向かった。
「お前！　なんてことを」
急いでケージの扉を開け、タロウをその中から出す。
「何って」
あまりの剣幕に思わず口ごもってしまう。角の丸いロ―テーブルの脇に立てかけられた駿介のカバンがパタリと倒れた。
「……ケージを買ってきたの」
ケージの扉が一人でに閉じてきいっという音が鳴る。
「太郎にこんなことをするなんて」
駿介はタロウを腕に抱えながら、失望と怒りが入り混じった表情でこちらを見ている。駿介に縋りつくタロウの怯えた目を見て、私は耐えきれない程の苛立ちを覚えた。
「あなたが犬なんか飼いたいっていたのが悪いんでしょう？　私はそもそも嫌いだったのに。世話も全部私に任せきりで何もしてくれないし。私だってしたいことも、しなきゃいけないこともあるのに」
食卓に並べたビーフシチューはまだ湯気を立てていた。
「全部タロウのせいじゃない」
一息に不満をぶつけると、駿介は今にも泣きだしそうな顔でこちらを見ていた。しばらく黙って俯いていたが、タロウが駿介の手をぺろぺろと舐め始めていた。慰めているつもりだろうか。そして駿介は決心したように顔を上げた。
「香織、俺が悪かった。明日病院にいこう」
タロウは駿介の髪と同じ真っ黒の毛並みで、私によく似た栗色の瞳をしていた。